がん －癌－

胃（い）がんについて

胃の粘膜から発生する悪性腫瘍

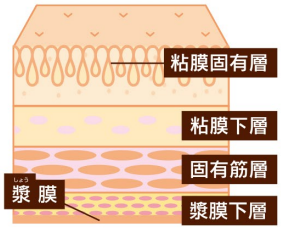
胃がんとは、胃の粘膜から発生した悪性腫瘍です。早期胃がんは無症状のことが多いのですが、胃部不快感などの軽い症状があることもあります。

胃の壁は内側から外側にかけて粘膜固有層、粘膜下層、固有筋層、漿膜（しょう）下層、漿膜と何層にもなっており、胃がんは一番内側の粘膜固有層から発生し、発育とともに粘膜下層、固有筋層、漿膜下層、漿膜とその深さを増していきます。

胃がんの転移の仕方には、播種性転移（胃の壁の外側にがんが露出し、腹膜にがん細胞がバラバラとこぼれて生着する）、血行性転移（血液の流れに乗ってがん細胞が胃と離れた臓器に運ばれ、そこで生着する）とリンパ行性転移（胃の近くのリンパ節から次々に遠くのリンパ節にがんが入っていき生着する）の３通りがあります。

最初の２番目（粘膜下層）の深さのがんであれば、転移を起こすことがほとんどないため、「早期がん」と呼ばれます。一方、３番目（固有筋層）の深さ以深のがんは、その深さに応じた転移の可能性が出てくるので「進行がん」と呼ばれます。

胃壁の層のイメージ図



何よりも大切な“早期発見”

「早期胃がん」の治る確率は非常に高く、早期発見が大切です。特に健康診断で発見されるがんは治る可能性が高いので、１年ごとの内視鏡検査が推奨されます。

胃がんの治療法

胃がんの原因に「ピロリ菌」の持続感染があり、発生予防のためにはピロリ菌除菌治療が有効です。

胃がんの治療法には、切除術と抗がん剤治療があり、がんの深達度（胃の壁における深さ）、進行度（深達度、リンパ節転移、血行性転移、腹膜転移の状況によって決められるがんの進み具合）、胃における部位、年齢、健康状態などで、それぞれ最適な治療法が選択されます。

切除術には、従来の開腹手術以外にも、腹腔鏡下手術（お腹の中を観察する内視鏡を用いる）や内視鏡的切除（胃の中を観察する内視鏡を用いる；EMRやESD）もあり、がんの進み具合によって最適な切除法を選択します。